

ふしぎだと思ふこと

これが科学の芽です

よく観察してたしかめ

そして考えること

これが科学の茎です

そうして最後になぞかとける

これが科学の花です

朝永振一郎

朝永先生の色紙。京都市青少年科学センター所蔵

科学する心とその喜びをやさしい言葉で見事にいい尽くしたこの有名な色紙は、1974（昭和49）年11月6日に、国立京都国際会館で湯川秀樹・朝永振一郎・江崎玲於奈の三博士を招いて開かれた座談会「ノーベル物理学賞受賞三学者 故郷京都を語る」（主催：京都市、京都市教育委員会）で、三博士に、京都の子供たちに向けた言葉をとの要請に応えて、朝永先生が書かれたものです。実物は、京都市青少年科学センターにあり、筑波大学ギャラリー朝永記念室にもコピーがあります。このときの講演でも述べていますが、朝永先生は、小学校の習字で先生から「お前はなんてこんなへんな字を書く」といわれて以来、字が苦手で、色紙のたくいはだいたい断っておられたそうです。しかし、このときは断り切れなかったのでしょうか。おかげで私たちはこのすばらしい言葉を受け継ぐことができました。

この言葉は、科学の心を表すと同時に、科学する心を育むには、何が大切かもよく表していると思います。朝永先生は、子どもの頃から、科学の芽となる「ふしぎ」をいっぱい見つけ、それを自分の手を動かして実験し、納得がいくまで考えました。

21世紀の世界に生きる若いみなさんも、この色紙の言葉を胸の中にとどめて、科学する心を培ってほしいと思います。筑波大学は朝永振一郎記念「科学の芽」賞の事業を通じて「科学っ子」、科学にチャレンジする若者を応援しています。ぜひたくさんの方々からの応募を期待します。

（詳しくは、本書の199～205頁「朝永先生と「科学の芽」の世界」（金谷和至）をご覧ください。）